

酒米品種「山田錦」の育成経過と母本品種 「山田穂」, 「短稈渡船」の来歴

池上 勝*・三好昭宏*・世古晴美*・渋谷幾夫**・西田清数***

Breeding Process of Sake-Brewing Rice Variety "Yamadanishiki" and the History of Parental Varieties "Yamadabo" and "Tankan-Wataribune"

Masaru IKEGAMI, Akihiro MIYOSHI, Harumi SEKO, Ikuo SHIBUYA and Kiyokazu NISHIDA

キーワード：水稲, 酒米品種, 山田錦, 山田穂, 短稈渡船, 育成経過, 兵庫県

緒言

酒米品種「山田錦」が育成されて平成16年(2004)で68年になる。現在も酒米の中心品種として君臨している「山田錦」の育成経過は、これまでにその詳細をまとめた資料がなく、また、育成地である兵庫県立農事試験場は昭和20年(1945)7月6日の明石大空襲により本館をはじめほとんどの施設が焼失²⁾、育成関係の野帳は残っていない。さらに育成に関わった方々も既に逝去され、不明な点が多い。

一方、最近「山田錦」の酒米としての評価が従来にも増して高くなり、「山田錦」の育成経過やその両親である「山田穂」, 「短稈渡船」についても関心が高く、問い合わせが多い。酒米試験地では、こうした要望に応えることと今後の酒米育種の参考にするため、現存している資料を整理してきた。その中で奨励品種採用時の会議の様子や当初の品種候補名が「昭和」であったことなど新たな発見があった。また、両親である「山田穂」, 「短稈渡船」の来歴についても、これまで以上に明らかにすることができた。今後さらに新たな資料の発見により内容はより充実すると考えられるが、現時点での「山田錦」の育成経過や母本である「山田穂」や「短稈渡船」の来歴について調査結果を報告する。

なお、本文中の個人名の敬称は省略した。また栽培特性などのデータについて、尺貫法表記のものはSI単位に換算して表記した。

1 「山田錦」の育成経過

(1) 県立農事試験場種藝部での育種

2004年8月31日受理

* 兵庫県立農林水産技術総合センター

** 上郡農林水産振興事務所

*** 元兵庫県立中央農業技術センター

「農業試験場60年史」²⁾によると兵庫県農事試験場は明治27年(1894)に設立され、種藝部を主体に翌明治28年(1895)に行われた水稲品種比較試験が稲の育種や関連事業の始まりである。その後、明治35年(1902)の園芸場の開設とともに、従来の試験場が種藝場になり、その中に種藝部、農芸化学部、植医部が設置された。明治45年(大正元年1912)からは原種育成事業を開始し、米麦品種の統一を図るため、多年の品種比較試験の結果、優良品種として「山田穂」, 「渡船」, 「奈良穂」, 「改良白玉」, 「都」, 「福山」, 「萬作坊主」, 「神力」, 「森早生」, 「福助」の10品種を選出し、その原種を県農会に配布している。大正3年(1914)からは純系淘汰法による育種を開始し、大正5年(1916)からは農商務省令第3号米麦品種改良奨励規則に基づいて、米麦原種圃を設置し原種栽培を行い、奨励品種として「山田穂」, 「渡船」, 「穀良都」, 「神力」, 「東京一本」の5品種を採用し、翌年から県農会経営の採種圃に配布した。大正10年(1921)からは人工交配による育種も始めた。また、昭和2年(1927)からは農林省水稲新品種育成事業の指定試験地になり、この事業では、「農林2号」や「ゴシヒカリ」の育成につながる「農林8号」, 「農林22号」など多くの品種が育成された。

(2) 「山田錦」の交配・選抜の担当者

昭和42年(1967)に兵庫県教育委員会から発行された「郷土百人の先覚者」¹⁾の藤川禎次の章にある記事が、交配や育成経過の担当者に関する唯一の資料である。この資料によると交配を行ったのは、当時、種藝部の技手であった西海重治と記されている。その後、選抜、固定に関係した人は、河淵健蔵、島田豊吉、三宅瑞穂、本坊大吉、小林三雄とされている。

図1は大正13年度(1924)から昭和12年度(1937)ま

での兵庫県立農事試験場の業務^{9,10,11,12,13,14,15,16,17,18,19,20,22,23)}の職員欄を参考に、「山田錦」の育成に携わったと考えられる担当者をまとめたものである。担当者は、本場の種藝部と酒造米試験地の技手や雇員、本場で農林省指定の水稲新品種育成事業に携わった技手ら、そして本場の原種の技手である。「山田錦」の育成は種藝部が中心になって進められたと考えられ、その中でも直接の担当者は、交配を行った西海重治（大正12年4月～大正13年12月）、島田豊吉（大正13年1月～昭和2年9月）、本坊大吉（昭和2年10月～昭和6年5月）と考えられる。本坊大吉は昭和6年（1931）5月に逝去しており、その後は昭和7年（1932）4月に原種から種藝部に異動した山下博（昭和7年4月～昭和11年）が担当したと考えられる。ただし、本坊大吉が逝去した昭和6年（1931）5月から山下博が種藝部に異動する間については、原種的小林三雄が山下博とともに担当していたかもしれない。また、水稲新品種育成事業のため兵庫県に赴任していた三宅瑞

穂や本場の原種で長年原種生産を担当した河淵健蔵らが「山田錦」の育成に関わったと思われる。

(3) 畿内支場交配説に対する見解

兵庫県で人工交配による育種事業の始まった当初は、大阪にあった農林省畿内支場から交配後代の系統が分譲されていた。「山田錦」についても、三宅瑞穂が畿内支場で交配したものを兵庫県に導入したという伝聞があるが、「山田錦」は兵庫県の種藝部が独自に交配したと考えている。その根拠は、大正13年度の業務功呈⁹⁾の本場育種・水稲人工交配の欄に、「人工交配により本県に適當なる優良新品種を育成せんが為め當場に於いて優良品種間に交配を行うと共に畿内支場にて交配セル未固定種の配付を受け栽培せり」とあり、雑種第一代の項に、「山田穂」×「短稈渡船」の記載がある。そして畿内支場から分譲を受けた未固定種については、雑種系統収量比較試験の項に、「大正12年度畿内支場より配付を受け栽培せる「山田

図1 「山田錦」の育成担当者

所属	担当当初の職名	氏名	担当期間	大12年 1923	大13年 1924	大14年 1925	昭元年 1926	昭2年 1927	昭3年 1928	昭4年 1929	昭5年 1930	昭6年 1931	昭7年 1932	昭8年 1933	昭9年 1934	昭10年 1935	昭11年 1936
本場・種藝	技手	金澤 為治	大正12年4月～昭和2年3月	農具へ													
	技手	西海 重治	大正12年4月～大正13年12月	12月まで													
	技手	島田 豊吉	大正14年1月～昭和2年9月	1月から 9月まで													
	技手	中部 富雄	大正12年4月～大正13年9月	9月まで													
	技手	本坊 大吉	昭和2年10月～昭和6年5月	10月から 5月まで													
	雇員	森川 清一郎	大正12年4月～昭和元年5月	5月まで													
	雇員	久保 嘉善	大正12年4月～昭和元年5月	5月まで													
	雇員	島住 一夫	大正14年4月～昭和元年3月、昭和3年6月～	園藝へ													
	雇員	磯野 篤	昭和3年7月～昭和4年3月	7月から 園藝へ													
	雇員	小野 哲二郎	昭和10年10月～12月	10月から12月まで													
酒造米試験地・種藝	農林技手	藤川 慎次	昭和3年6月～	6月から													
	雇員	浅田 静夫	昭和3年6月～昭和8年4月	6月から 4月まで													
	雇員	井本 克巳	昭和8年4月～昭和10年1月	1月まで													
	雇員	中野 良雄	昭和9年10月～昭和11年7月	10月から 7月まで但馬分場へ													
	雇員	田村 喜豊	昭和10年10月～昭和11年1月	8月から 1月まで													
地方農林技師	地方農林技師	三宅 瑞穂	昭和2年6月～昭和11年5月	6月から 5月まで													
	農林技手	岡田 清澄	昭和2年6月～昭和5年5月	6月から 5月まで													
	農林技手	芝田 志朗	昭和2年5月～昭和4年7月	5月から 7月まで													
	農林技手	佐々木 六太郎	昭和4年8月～	8月から													
	農林技手	松崎 忠義	昭和5年5月～昭和7年3月	5月から 小麦原種へ													
地方農林技師	地方農林技師	奥山 元吉	昭和7年3月～12月	3月から12月まで													
	農林技手	海野 佐一	昭和8年3月～	3月から													
本場・原種	技手	河淵 健蔵	大正12年4月～	6月より													
	技手	山下 博	大正12年6月～	種藝へ													
	技手	松下 由雄	大正12年4月～昭和8年8月	8月まで													
	農林技手	小林 三雄	昭和4年4月～昭和7年3月	小麦原種へ													
	農林技手	鷺野 麟太郎	昭和8年4月～昭和11年4月	4月まで													
農林技手	中谷 壽	昭和8年6月～昭和11年3月	6月から														

注)黒枠は主な育成者の担当期間を示す。

穂」×「晩33号」の雑種第四代に於いて・・・」等とあり、実際に種藝部で交配したものと畿内支場から分譲を受けたものについては、明確に区別して記載している。

また、昭和13年(1938)3月に兵庫県立農事試験場が発行した「米麦原種一覧表」²¹⁾の「山田錦」の説明欄にも「本種は當場デ大正十二年「山田穂」ヲ母トシ「短稈

渡船」ヲ父トシテ交配ヲ行ヒ爾來當場デ選抜固定シ・・・」とある。以上の点から「山田錦」の交配は畿内支場ではなく、兵庫県立農事試験場種藝部で行われたことに相違ないと考えられる。

表1 「山田錦」の育成経過

年次		本場種藝部			酒造米試験地		但馬分場
年号	西暦 世代	個体・系統選抜	生産力検定	地方委託試験	水稻品種比較試験	地方委託試験	地方委託試験
大正12年	1923 交配	山田穂 / 短稈渡船					
大正13年	1924 F 1	個体養成					
大正14年	1925 F 2	栽植数:500個体 選抜個体数:50~70個体					
昭和元年	1926 F 3	選抜:2系統・7個体					
昭和2年	1927 F 4	栽植:48系統 選抜:10系統					
昭和3年	1928 F 5	(詳細記載なし)	供試:10系統 選抜:優良1系統 (系統番号161号)				
昭和4年	1929 F 6	栽植:6系統 選抜:1系統 (15個体)	供試:6系統 選抜:1系統				
昭和5年	1930 F 7	栽植:15系統 選抜:10系統 (45個体)	供試:1系統				
昭和6年	1931 F 8	栽植:45系統 選抜:8系統 (22個体)	供試:2系統				
昭和7年	1932 F 9	栽植:22系統 選抜:4系統 (16個体)	供試:7系統 選抜:優良1系統 (系統名:大粒50-7)	1カ所: 佐用郡徳久村 (船引庄之介)	供試:1系統 (系統名:山田穂 ×短稈渡船50-7)	1カ所: 美糞郡奥吉川村 (東田直太郎)	
昭和8年	1933 F 10	栽植:16系統 選抜:3系統 (12個体)	供試:1系統 (系統名:大粒50-7) 標肥及び多肥栽培	3カ所: 有馬郡三田町 (井上喜作) 神崎郡鶴居村 (古家眞治) 佐用郡三日月村 (清水清吉)	供試:4系統 (系統名: 山×短50-7, 山×短1-2-3, 山×短2-4-4, 山×短12-38-17)	1カ所: 美糞郡奥吉川村 (東田直太郎)	
昭和9年	1934 F 11	栽植:13系統 選抜:3系統 (12個体)	供試:2系統 (系統名: 山渡50-7 山渡4-4-8) 標肥及び多肥栽培	2カ所: 神崎郡鶴居村 (古家眞治) 佐用郡三日月村 (清水清吉):	供試:2系統 (系統名: 山×渡50-7, 山×渡2-4-4)	1カ所: 美糞郡奥吉川村 (東田直太郎)	1カ所: 城崎郡五荘村 (森田熙)
昭和10年	1935 F 12	栽植:18系統 選抜:4系統 (16個体)	供試:2系統 (系統名: 山渡50-7 山渡4) 標肥及び多肥栽培	2カ所: 神崎郡鶴居村 (古家眞治) 佐用郡三日月村 (清水清吉):	供試:2系統 (系統名: 山×渡50-7, 山×渡4)		2カ所: 城崎郡五荘村 (日詰勘蔵) 多紀郡味間村 (河南市蔵):
昭和11年	1936 F 13	栽植:16系統 選抜:5系統 (20個体) 「山田錦」と命名し、原種に採用。原種生産開始	供試:3系統				
昭和12年	1937 F 14	栽植:18系統 選抜:3系統 (11個体)	供試:2系統				

(4) 育成経過

図2に「山田錦」の系譜を、表1に「山田錦」の育成経過を示す。育成経過や生産力検定試験の概略は、大正13年度から昭和12年度の業務工程の記載をもとに整理した。

育種法は人工交配による系統育種法である。交配は大正12年(1923)に行い、母親は「山田穂」(やまだほ)、父親は「短稈渡船」(たんかんわたりぶね)である。F1、F2世代は個体選抜のみで、F3世代から系統選抜を行っている。昭和3年(1928)のF5世代からは、収量性や栽培特性、品質を主に調査する生産力検定試験が始まっている。この年の品種名は「系統番号161」である。その後、昭和4年(1929)から昭和6年(1931)までの3年間の生産力検定試験の詳細な成績は省略され業務工程に記載がない。昭和7年(1932)のF9世代には「大粒50-7」の系統名で試験に供されている。また、種藝部が委託した水稲地方委託試験が佐用郡徳久村で行われている。「山田錦」と命名される以前の系統名は「山渡50-7」が正式名とされ、前出の「米麦原種一覧表」²⁰⁾には、昭和6年(1931)に「山渡50-7」と命名したとの記載がある。ただし、系統名は種藝部でも昭和7年(1932)までは「大粒50-7」と呼ばれ、酒造米試験地では昭和8年(1933)まで「山田穂×短稈渡船50-7」や「山×短50-7」とされており、当時は現在ほど厳密に系統名を決めることがなかったのではないかと推測される。

昭和8年(1933)の業務工程には、系統名は「山渡50-7」で生産能力比較試験に供され、「山渡50-7は短稈多げつにして収量多く品質も概して良く栽培容易にして有望と認めたり」とあり、収量性や栽培特性が優れ、有望視されている。この年から水稲品種比較試験では施肥水準を標準と多肥の2水準で行っている。水稲地方委託試験の箇所数も増え、有馬郡三田町、神崎郡鶴居村、佐用郡三日月村の3カ所で行われた。昭和9年(1934)の生産能力比較試験においても、前年同様、「山渡50-7は収量多く品質も概して良く有望と認めたり」との記載があり、評

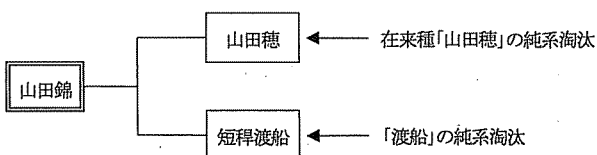


図2 「山田錦」の系譜
注) 上段が母本、下段が父本

価が高かった。また、水稲品種比較試験ではこの年から少肥栽培の試験も行われているが、「山渡50-7」は供試されている酒造米(大粒種)6品種の中では、収量、品質ともに上位であった。水稲地方委託試験も神崎郡鶴居村、佐用郡三日月村の2カ所で行われ、神崎郡で成績が良好との記載がある。また、この年からは県北部の但馬分場が委託した水稲地方委託試験にも供試され、城崎郡五荘村で試験が行われた。昭和10年(1935)もほぼ同様の規模で試験が行われ、この年の業務工程に、優良系統との記載と共に「なお、山渡50-7は昭和11年度より山田錦と改称し奨励品種に編入せり」との記載がある。

「山田錦」の原種(当時は奨励品種と言う呼び方よりは原種と呼ばれていた)への採用の様子は、唯一、兵庫県農会通信第304号²⁰⁾の記事で伺うことができる。記録として記事の内容を転載させていただく。見出しは「新原種に近畿9号、山田錦-保村8号、外3種廃止-本県原種改廃協議会で」とある。記事は「県経済部農産課主催の水稲原種改廃協議会は1月31日午前11時より県立農事試験場で開催。郡市農会技術員、米検支所長の外、県農会長島幹事、農事試験場江角場長、三宅、河淵技師その他穀物検査所副島、高見両技師、主催者側副見経済部長、島原農産課長、西田、長尾技師以下係員等約60名出席。副見経済部長座長となり左記協議事項を説明し、三宅、河淵両技師、堀之内技師より夫々説明をなしたる所、新たに原種に編入せむとする昭和を山田錦に改名したる外概要次の如き意見の発表ありて結局原案を承認し、ついで指事項を附議し異議なく午後3時半閉会した。廃止せむとする保村8号は城崎、宍粟より又新山田穂2号は東播地域より今暫く保存の要望があったが県下の普及歩合より見れば僅々2%以下のものであり且つ逐年減少しつつあるを以て結局廃止に決定。協議事項 一 水稲原種改廃に関する件 農事試験場に於ける試験成績並原種の普及状況に鑑み水稲原種を左の通り改廃せむとす。甲 新に原種に編入せむとする品種(中略)②山田錦 本種は山田穂と渡船との人工交配に依り選出せられたる品種にして草丈短く品質優良にして且つ収量多きを認めたるを以て原種に編入せむとす(決定)。乙、廃止せむとする品種 ①保村8号、②新山田穂2号、③新東京一本1号、④七面鳥糯 右4品種は何れも昭和12年度一般栽培のもの限り原種より削除せむとす(決定)(中略)新原種の特性 農試本場成績 山田錦(来歴)当場に於いて大正12年「山田穂」を母とし「短稈渡船」を父として交配を行ひ爾来当場に於て選抜固定し昭和6年「山渡50-7」と命名せるものなり。(特性)中生種の酒造米にして短稈多蘖にして倒伏せず栽培容易なる多収良質の優良品種に

して摂播中北部に好適す。」とある。

以上のように「山田錦」は昭和11年(1936)の原種改廃協議会で新品種として採用することになり、昭和11年2月27日付兵庫県報第1065号¹⁾で告示された。

なお、兵庫県農会通信第304号の記事によると、当初「山田錦」の品種候補名は「昭和」であったようである。酒米試験地に残っている原種改廃協議会の資料にも、手書きの「昭和」という記入が残っている。どのような理由で「昭和」という品種名が採用されずに「山田錦」と命名されたのかは、現時点では資料や伝承がない。推測ではあるが、「昭和」という品種候補名が見送られた背景には、山形県での「昭和〇号」との混同を避けるためではないかと思われる。山形県庄内地方では、昭和4年(1929)から昭和8年(1933)にかけて、民間育種家佐藤弥太右衛門が、「昭和イ号」から「昭和ヌ号」という「昭和」にいろは名を付けた品種9品種を育成している。このうち「昭和ニ号」は昭和11年(1936)から昭和23年(1948)まで山形県の奨励品種に採用されている²⁾。これらの情報が「山田錦」の品種名を最終決定する際に考慮されたのではないかと思われる。「山田錦」の「山田」については、母親の「山田穂」に由来すると考えられる。

実際の原種圃での原種生産は、昭和11年(1936)から行われ、配付が始まった。「山田錦」の系統選抜は、昭和12年(1937)のF14世代まで原種生産と平行して行われている。当時はまだ「原々種」との記載はないが、系統選抜が「原々種」に当たるものと考えられる。酒米試験地に残っている野帳から判断すると、「山田錦」の原々種栽培は、昭和35年(1960)までは明石の本場で行われており、その後、昭和36年(1961)からは現在のように酒米試験地に移され行われるようになった。

(5) 「山田錦」の育成と酒造米試験地の関わり

図3は藤川禎次と昭和30年頃の酒米試験地の写真である。酒造米試験地(現、酒米試験地)は、昭和3年(1928)に兵庫県加東郡社町沢部に設置された。初代の主任が藤

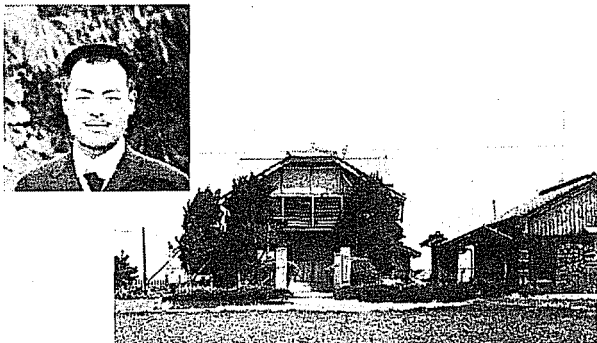


図3 藤川禎次と酒米試験地

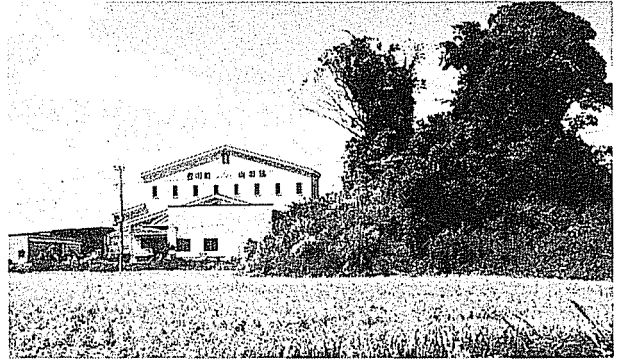


図4 現地試験圃場周辺の現況(吉川町金会)

川禎次である。藤川禎次が「山田錦」の育成に関わるのは、昭和7年(1932)からである(図1,表1)。昭和7年度の業務功程¹⁷⁾の酒造米試験地の部の記載では、この年から酒造米試験地でも水稲品種比較試験に供試されている。系統名は「山田穂×短稈渡船50-7」となっている。比較品種は「新山田穂1号」で、この年の成績では、倒伏が無く、収量比率は101%となっている。酒造米試験地では昭和10年(1935)まで水稲品種比較試験に供試された。

また、酒造米試験地では、昭和5年(1930)から美婁郡奥吉川村金会に水稲地方委託試験の現地圃場を設置している。最初の担当農家は東田直太郎である。「山田錦」の前身である「山田穂×短稈渡船50-7」は昭和7年(1932)からこの現地試験に供試されている。現地圃場のあった場所は、現在は圃場整備されているが、のみり農業協同組合のライスセンター周辺の圃場であった(図4)。「山田錦」の奥吉川村での現地試験は昭和9年(1934)までの3年間行われた。酒造米試験地及び奥吉川村での成績も、明石本場の傾向と同じで、「山田錦」は倒伏が少なく、収量性が高く品質も優れていた。また、藤川は酒米で重要な玄米形質について詳細に調査を行っている。これらの試験結果から「山田錦」の優秀さが認められ、品種誕生につながったと考えられる。「山田錦」の誕生と普及に果たした藤川の役割は大きい。

余談ではあるが、藤川禎次の次女片山洋子によると、藤川はこの現地圃場まで片道約20kmの道のりを自転車で調査に出かけていたと言うことである。酒米について非常に熱心であった藤川は舗装されていない砂利道を、その年の稲の出来具合を観察することを楽しみながら、通っていたのではないかと想像できる。

2 「山田錦」の育成当時の品種特性

表2は本場種藝部の生産力検定試験と酒造米試験地の水稲品種比較試験の耕種概要である。参考として現在の

表2 耕種概要

本場種藝部・生産力検定試験

年度	施肥の種類	区数	播種期	移植期	栽植密度	植付本数	施肥 (N成分 kg/a)		
							基肥	追肥	計
昭和3年			5月3～4日	6月下旬	30.3×26.0(12.7株/m ²)	4本	0.49	0.34	0.83
昭和7年	普通肥	1	5月上旬	6月下旬	30.3×26.1(12.6株/m ²)	4本			0.98
昭和8年	普通肥	2	5月上旬	6月下旬	25.7×22.7(17.1株/m ²)	4本	0.30	0.33	0.63
	多肥料	2					0.450	0.495	0.945
昭和9年	普通肥	2	5月上旬	6月下旬	25.7×22.7(17.1株/m ²)	4本	0.30	0.33	0.63
	少肥料	2							
昭和10年	普通肥	2	5月上旬	6月下旬	25.7×22.7(17.1株/m ²)	4本	0.30	0.33	0.63
	多肥料	1					0.45	0.50	0.95
酒造米試験地・水稻品種比較試験									
昭和7年		2	5月5日	6月23～24日	26.1×22.7(16.9株/m ²)	4本	0.77		0.77
昭和8年		1～2	5月5～6日	6月22～23日	26.1×22.7(16.9株/m ²)	4本	0.78		0.78
昭和9年		1～2	5月4～5日	6月24～25日	26.1×22.7(16.9株/m ²)	4本	0.78		0.78
昭和10年	標準肥	1～2	5月4～6日	6月21～23日	26.1×22.7(16.9株/m ²)	4本	0.78		0.78
	多肥						0.93		0.93
現, 気象感応調査(稚苗)			5月15日	6月5日	30.0×16.0(20.8株/m ²)	3本	0.40	0.20	0.60

注) 本場種藝部の昭和4～6年の耕種概要は記載なし。

酒米試験地の気象感応調査の耕種概要も表記した。当時の移植期は6月下旬で、現在の6月上旬移植よりかなり遅い。これは当時、試験場内でも麦に関する試験が多かったことによると思われる。苗は育苗日数が50日以上のもので、栽植密度は、現在の標準である条間30cmよりやや狭く、株間はやや広がっている。a当たりの窒素成分施用量は現在の0.5～0.6kg程度よりやや多い。肥料の種類は鯨絞粕、大豆油粕、硫酸アンモニウム、過燐酸石灰、硫酸加里を使用していた。表3は本場種藝部の生産力検定試験と水稻地方委託試験の成績を、表4は酒造米試験地および美濃郡奥吉川村金会の現地試験の成績である。

本場種藝部および酒造米試験地の昭和8～10年の3カ年の平均値を比較品種の「新山田穂1号」と比較すると、出穂期、成熟期は1日程度遅いほぼ同熟の晩生種である。稈長は15cm程度短く、当時の品種の中ではかなり短稈であり、倒伏の発生も少ない。表5に当時の酒米品種の草型を示しているが、「短稈渡船」以外の品種は、穂重型もしくは偏穂重型であるが、「山田錦」は穂長が短く、穂数が多い中間型である。「山田錦」の草型は、父親である「短稈渡船」に由来するところが大きいと考えられる。いもち病の発生もやや少ない。収量性(玄米相当重量)はやや高く、品質も優れている。

表6は酒造米試験地における「山田錦」の玄米形質の調査結果である。藤川は心白や外白(腹白)粒の割合、粒形、さらに剛度など、玄米形質について詳細に調査を

している。「山田錦」は「新山田穂1号」や「辨慶」よりもやや大粒で心白の発現が多いことがわかる。

表7、表8は現在酒造米試験地で保存している「山田錦」とその交配親および関連品種の生育および玄米特性である。「山田錦」の父親である「短稈渡船」は現存していないため、特性が類似している「渡船2号」の特性を載せている。ただし、脱粒性については「短稈渡船」は難であるが、「渡船2号」は易であり、この点は特性が異なっている。

3 「山田錦」とその両親

(1) 母親品種「山田穂」の由来

母親の「山田穂」は、もともと明治のはじめ頃から県下各地で栽培されていた品種である。県では、県下各地に栽培されていた「山田穂」を取り寄せ、品種比較試験を行い、その結果優良であるとして、明治45年(1912)に原種に指定した。また、大正5年(1916)からは純系淘汰法による選抜を行っている⁶⁾。その結果、大正10年(1921)には「新山田穂1号」、大正11年(1922)には「新山田穂2号」をそれぞれ優良として原種に編入している⁸⁾。従来の「山田穂」は「新山田穂1号」の原種への採用で、原種から外された。

「山田穂」の由来は昭和36年(1961)に発行された「兵庫の酒米」(兵庫県酒米振興会10周年記念誌)²⁰⁾に詳しく紹介されている。それによると兵庫県多可郡中町説、美

表3 本場種藝部における生産力検定試験，水稲品種比較試験および水稲地方委託試験の結果

生産力検定試験・水稲品種比較試験

年次	施肥の種類	品種名	出穂期	成熟期	草丈 cm	稈長 cm	穂長 cm	穂数 本/株	倒伏	首いもち	葉いもち	メイ虫被害	粒型	品質	玄米1			藁重量 kg/a
			月日	月日											外重量 g/L	反当収量 kg/a	容積 L/a	
昭和3年		系統番号161	9/2	10/22	122.7		19.4	23.8	中				大	上の中	839.8	43.8	52.1	86.5
		新山田穂1号	9/2	10/22	134.8		20.9	16.4	多				大	上の中	829.4	41.9	50.5	83.4
		新山田穂2号	9/2	10/22	130.3		20.6	16.3	多				大	上の中	831.5	44.0	53.0	80.5
昭和7年	普通肥料	大粒50-7	9/12	11/14	119.1		20.0	17.0	微	無	無	少	大	中下	817.0	46.2	56.6	102.1
		新山田穂1号	9/11	11/13	127.3		20.9	16.4	少	無	無	中	大	中下	810.7	37.9	46.7	60.3
昭和8年	普通肥料	山渡50-7	9/6	11/3		94	20.2	17.0	無	無	無	無	大	上下	835.7	49.3	59.1	92.5
		新山田穂1号	9/6	11/2		106	21.8	14.0	無	無	無	無	大	中上	835.7	46.7	55.9	98.4
	新山田穂2号	9/5	11/1		102	21.1	13.0	無	無	無	無	大	中中	833.6	50.4	60.5	84.2	
	多肥料	山渡50-7	9/7	11/9		96	20.7	18.0	微	無	無	無	中	中中	833.6	52.9	63.6	88.2
新山田穂1号		9/6	11/7		110	23.0	14.0	中	無	無	無	中	中中	829.5	48.2	58.2	87.9	
昭和9年	普通肥料	山渡50-7	9/9	11/6		93	18.8	19.0	無	無	無	無	中	上下	837.8	41.7	49.8	78.7
		新山田穂1号	9/8	11/6		108	20.5	14.0	無	無	無	無	中	中上	839.8	34.7	41.4	78.0
	少肥料	山渡50-7	9/8	11/5		88	19.0	17.0	無	無	無	無	中	上下	839.8	40.0	47.7	74.1
昭和10年	普通肥料	山渡50-7	9/11	11/8		96	18.2	19.0	少	無	無	無	中	中上	833.6	39.1	46.9	72.9
		新山田穂1号	9/8	11/6		108	20.5	14.0	無	無	無	無	中	中上	839.8	34.7	41.4	78.0
	新山田穂2号	9/10	11/6		105	18.8	14.0	中	無	無	無	中	中中	837.8	36.9	44.1	76.6	
昭和10年	多肥料	山渡50-7	9/12	11/9		103	18.3	18.0	中	無	無	無	中	中中	837.8	37.2	44.4	79.2
		新山田穂1号	9/11	11/8		118	19.7	15.0	甚	少	少	少	中	中下	833.6	29.9	35.8	75.5
	新山田穂2号	9/11	11/8		111	19.0	16.0	多	無	無	無	中	中下	835.7	28.5	34.2	72.6	
昭和10年	少肥料	山渡50-7	9/10	11/7		93	18.8	16.0	少	無	無	無	中	中上	835.7	39.5	47.3	71.2
		新山田穂1号	9/10	11/6		106	19.7	11.0	少	無	無	無	中	中中	839.8	35.2	41.9	73.4
		新山田穂2号	9/9	11/6		103	18.7	12.0	無	無	無	無	中	中中	835.7	41.0	49.0	74.9
昭和8~10年		山渡50-7	9/9	11/6		94	19.1	18.0	無	無	無	中	上下	835.7	43.4	51.8		
昭和8~10年	標準栽培	山渡50-7	9/9	11/6		100	19.2	13.0	少	無	無	無	中	中上	837.8	40.5	48.4	
昭和8~10年	区平均	新山田穂1号	9/8	11/5		109	20.7	14.0	少	無	無	無	中	中上	835.7	39.4	47.1	
昭和8、10年		新山田穂2号	9/8	11/4		104	20.0	14.0	少	無	無	無	中	中中	835.7	43.7	52.3	

概評 昭和7年 中生大粒種では山田穂×短稈渡船50-7成績良好
 昭和8年 優良系統：山渡50-7は短稈多げつにして収量多く品質も概して良く栽培容易にして有望と認めたり
 昭和9年 優良系統：山渡50-7は収量多く品質も概して良く有望と認めたり
 昭和10年 優良系統：標準栽培多肥栽培並びに少肥栽培の各栽培条件において標準奨励品種に比べ収量多く品質概して良好で有望と認めたるは山渡50-7、山渡4である。なお、山渡50-7は昭和11年度より山田錦と改称し奨励品種に編入せり

水稲地方委託試験

年次	実施場所	品種名	出穂期	成熟期	草丈 cm	稈長 cm	穂長 cm	穂数 本/株	倒伏	首いもち	葉いもち	病害 多少	品質	玄米1		
			月日	月日										外重量 g/L	反当収量 kg/a	容積 L/a
昭和7年	佐用郡 徳久村	大粒50-7	9/8	11/10	118.2		19.4	19.3	無			微	中上	800.3	40.8	51.0
		新山田穂1号	9/8	11/8	135.5		19.1	13.3	無			少	中上	804.5	43.5	54.1
	有馬郡 三田村	山渡50-7	9/4	11/5		110	19.6	21.0	甚	微	微		下上	817.0	49.1	60.1
		新山田穂1号	9/3	11/1		122	21.2	15.0	甚	微	微		中下	827.4	48.9	59.1
昭和8年	神崎郡 神居村	山渡50-7	9/1	10/30		121	19.7	18.0	少	無	無	無	中上	833.6	52.4	62.8
		新山田穂1号	9/1	10/29		122	21.0	13.0	多	無	無	無	中上	837.8	48.6	58.0
		新山田穂2号	9/1	10/29		116	20.8	13.0	多	無	無	無	中中	837.8	54.7	65.3
昭和9年	佐用郡 三日月村	山渡50-7	9/6			104	18.8	15.0	無	無	無	無	中中	837.8	47.6	56.8
		新山田穂1号	9/5			116	20.8	12.0	少	無	無	無	中中	839.8	48.1	57.2
		新山田穂2号	9/5			113	20.0	12.0	無	無	無	無	中中	839.8	49.8	59.3
昭和9年	神崎郡 神居村	山渡50-7	9/3	11/6		101	20.6	20.0	中	無	無	無	中中	835.7	45.8	54.8
		新山田穂1号	9/2	11/4		116	21.8	14.0	中	無	無	無	中中	833.6	41.1	49.3
昭和10年	佐用郡 三日月村	山渡50-7				101	19.0	17.0	無	少	少	無	中上	839.8	40.1	47.8
		山渡50-7	9/7	11/3		103	20.7	16.0	少	無	無	無	中上	831.5	42.2	52.3
		新山田穂1号	9/7	11/3		117	22.8	12.0	中	無	無	無	中中	835.7	34.7	41.5
昭和10年	佐用郡 三日月村	山渡50-7				94	18.8	13.0	無	無	無	無	上下	841.9	37.9	45.0

概評 昭和9年 山渡50-7は神崎郡において概して良好の成績をしめせり
 昭和10年 山渡50-7は神崎郡において概して良好の成績をしめせり

表4 酒造米試験地における水稻品種比較試験および水稻地方委託試験の結果

水稻品種比較試験 (酒造米試験地)

年次	施肥の種類	品種名	出穂期	成熟期	草丈 cm	稈長 cm	穂長 cm	穂数 本/株	倒伏	イモ チ多少	粒型	品質	玄米1	玄米反当収量	
			月日	月日									舂重量 g/L	重量 kg/a	容積 L/a
昭和7年	標準肥	山田穂×短 稈渡船50-7	9/9	11/3		102.1	19.1	15.6	無	少		上下	848.2		51.9
		新山田穂1号	9/8	11/2		115.2	20.3	11.3	少	中		上	848.2		50.3
		新山田穂2号	9/8	11/2		111.8	19.7	10.9	中	中		上下	850.2		54.3
		辨慶	9/9	11/3		107.3	19.1	11.2	少	中		上下	848.2		52.7
昭和8年	標準肥	山×短50-7	9/2	10/30	114.2	96.3	17.9	17.5	中	少	大	上	825.3	40.2	48.7
		新山田穂1号	9/3	10/30	131.2	111.8	19.4	13.2	中	中	大	上	831.5	40.7	48.9
		新山田穂2号	9/3	10/30	131.5	112.4	19.1	14.7	多	中	大	中上	829.4	44.2	53.0
		辨慶	9/4	10/31	127.9	109.1	18.8	14.6	多	中	大	中上	831.5	43.9	50.5
昭和9年	標準肥	山×渡50-7	9/4	11/1		97.9	19.7	19.7	少	少		上下	841.9	45.2	53.7
		新山田穂1号	9/4	10/31		113.0	21.2	13.6	多	中		上下	841.9	43.0	51.1
		新山田穂2号	9/3	10/30		110.9	20.3	13.9	中	少		上下	839.8	45.5	54.2
		辨慶	9/3	10/31		108.2	20.0	13.8	中	少		上下	841.9	44.8	53.3
昭和10年	標準肥	山渡50-7	9/9	11/9		95.0	18.1	20.0	無	少		上下	839.8	43.2	51.5
		新山田穂1号	9/8	11/7		111.0	19.7	14.0	中	中		中上	841.9	40.7	48.5
		辨慶	9/9	11/8		101.0	18.6	14.0	無	少		上下	841.9	42.2	50.0
		野条穂	8/27	10/18		97.0	21.1	14.0	少	中		中上	846.1	37.6	44.6
	多肥	山渡50-7	9/9	11/10		95.0	18.6	20.0	少	中		中上	837.8	44.1	52.6
昭和8~10年	標準肥 平均	新山田穂1号	9/8	11/9		111.0	20.4	15.0	多	少		中中	839.8	40.2	47.8
		辨慶	9/9	11/10		105.0	19.1	15.0	少	中		中上	839.8	44.8	53.3
		野条穂	8/28	10/18		99.0	21.2	14.0	中	中		中中	844.0	33.8	40.0
		山渡50-7	9/5	11/3		102.0	19.7	19.0	少	少		上下	835.7	42.9	51.3
		新山田穂1号	9/5	11/2		119.0	21.3	14.0	中多	中		上下-中上	837.8	41.5	49.5
辨慶	9/5	11/3		113.0	20.4	14.0	中	少中		上下-中上	837.8	43.6	51.3		
野条穂	8/26	10/14		109.0	21.6	13.0	少中	少		上下-中上	839.8	42.3	50.3		

水稻地方委託試験 (酒造米試験地) 実施場所:美糞郡奥吉川村金会 東田直太郎

年次	品種名	出穂期	成熟期	草丈 cm	稈長 cm	穂長 cm	穂数 本/株	倒伏	イモ チ多少	品質	玄米1	玄米反当収量	
		月日	月日								舂重量 g/L	重量 kg/a	容積 L/a
昭和7年	山田穂×短 稈渡船50-7	9/10	11/9		96.4	18.8	20.7	少	少	上下	833.6		47.6
	新山田穂1号	9/10	11/6		109.4	21.2	16.4	少	中	中上	837.8		43.0
	新山田穂2号	9/9	11/2		106.4	20.3	13.0	中	中	中上	837.8		46.1
昭和8年	山×短50-7	9/6	11/7	120.0	100.9	19.1	21.0	中	少	上下	841.9		61.2
	新山田穂1号	9/5	11/4	139.1	118.2	20.9	14.2	甚	中	中上	829.5		51.7
	新山田穂2号	9/5	11/4	134.8	114.8	20.0	14.4	甚	中	中上	833.6		56.0
昭和9年	山×渡50-7	9/8	11/2		103.6	20.3	18.4	少	少	上下	835.7	43.2	51.7
	新山田穂1号	9/6	11/2		118.2	21.8	12.6	中	中	中上	827.4	31.6	38.2
	新山田穂2号	9/8	11/2		116.7	19.1	13.3	中	中	中上	831.5	31.3	37.7

表5 山田錦 (山渡50-7) の形態特性

品種名	草型	粒着疎密	脱粒性	芒の多少	芒の長短	ふ色	芒および ふ先色	参考資料 番号
山田	中間型	中	易	無	—	黄白	黄白	1,2
辨慶	偏穂重型	中	易	無	—	黄白	黄白	1,4
新山田穂1号	偏穂重型	中	易	極稀	短	黄白	黄白	1,4
新山田穂2号	偏穂重型	密	易	極稀	短	黄白	黄白	4
野条穂	偏穂重型	中	易	無	—	黄白	黄白	4
短稈渡船	偏穂数型		難	中	中	黄白	黄白	3,5
渡船	穂重型		やや易	中	中	黄白	黄白	3,5
播磨	偏穂重型		易	痕跡	極短	黄白	黄白	3,5
奈良穂10号	穂重型		易	稀	短	黄白	黄白	3,5
穀良	穂重型		やや易	無	—	黄白	黄白	3,5

注) 参考資料

- 1: 水稻原種改廃に関する件 (兵庫県報第1065号 1936年2月27日)
- 2: 米麦原種一覧表 (兵庫県立農事試験場 1938年3月)
- 3: 米麦重要品種一覧表 (兵庫県立農事試験場 1927年3月)
- 4: 品種問題より見たる近畿地方の稲作 (三宅瑞穂 農業及園芸 11(1) 293-311 1936年)
- 5: 品種比較試験 (昭和3年度兵庫県立農事試験場業務日程 酒造米試験地ノ部 148-154 1930年)

表6 山田錦(山渡50-7)の玄米特性(酒造米試験地 昭和10年調査)

施肥の種類	品種名	千粒重	千粒容量	心白粒	心白+ 外白粒	外白粒	無腹白粒	粒長	粒幅	粒厚	粒長/ 幅比	挫折 剛度
		g	ml	%	%	%	%	mm	mm	mm		
標準肥	山渡50-7	26.7	19.0	2.0	92.0	5.0	1.0	5.59	3.15	2.12	1.77	80
	新山田穂1号	25.1	17.9	1.0	87.0	11.0	1.0	5.43	3.11	2.09	1.75	72
	辨慶	26.4	18.8	2.0	77.0	19.0	3.0	5.56	3.12	2.11	1.78	77
	野条穂	25.7	18.7	17.0	51.0	21.0	11.0					

表7 酒米保存品種の生育特性

品 種 名	出穂期 月日	成熟期 月日	稈長	穂長	穂数	倒伏 程度	草型	芒の 有無	芒の 長短	脱粒性	ふ色	芒及び ふ先色
			cm	cm	本/株	0-10						
山 田 錦	8.28	10.12	102	20.6	16.3	5.0	中間	無	—	易	黄白	黄白
山 田 穂	8.28	10.8	115	21.6	9.8	5.0	偏穂重	極稀	極短	やや易	黄白	黄白
渡 船 2 号	8.30	10.15	94	19.2	21.2	4.8	偏穂数	多	中長	易	黄白	黄白
渡 船	9.1	10.21	113	22.8	11.5	5.3	偏穂重	多	中長	易	黄白	黄白
渡 雄 町	9.1	10.19	112	23.0	12.3	5.0	偏穂重	多	長	易	黄白	黄白

注) 供試品種の「山田穂」は京都大学(No132),「渡船2号」は(独)農業生物資源研究所(整理番号0010484),「渡船」は九州大学(No1681)を用いた。特性値は1996~98年の3カ年の平均値。移植期は6月10~13日で、手植えの1本植。施肥は基肥に窒素成分でa当たり0.4kgのみ施用。表8も同じ。倒伏程度は0(無)-5(中)-10(甚)で示す。

表8 酒米保存品種の玄米特性

品 種 名	千粒重 g	粒長/ 粒幅比	心 白 発 現 率				腹白 多少 %	腹白 大小	精玄米 粒厚 mm	玄米タンパ ク質含量 %
			大 %	中 %	小 %	計 %				
山 田 錦	28.2	1.71	17.3	13.7	24.7	55.7	67.0	中	1.99	5.9
山 田 穂	24.2	1.62	2.3	5.3	15.3	23.0	54.7	中大	1.89	5.8
渡 船 2 号	26.6	1.66	9.0	8.0	10.3	27.3	88.7	大	1.99	5.4
渡 船	25.7	1.67	4.3	4.7	22.0	31.0	67.3	中	1.97	6.2
渡 雄 町	26.2	1.68	17.0	9.3	17.3	43.7	52.7	中大	2.00	5.6

注) 精玄米粒厚は、精玄米にふるい分ける粒厚のこと。玄米タンパク質含量は、玄米粉を近赤外分光法により測定。

囊郡吉川町説, 神戸市北区山田町説の3つの説がある。

中町説は明治のはじめ(10年頃と推定)に中町東安田の山田勢三郎が自分の圃場の中から優良な株を見つけ出し選抜したこととされている。山田勢三郎は、この種子を増殖し、近隣の農家にも配布した。酒造家の評判も良く、自らの姓を取って「山田穂」と名付けたとされる。この功績をたたえ、明治37年(1904)に頌徳碑が建立されている(図5)。西脇市史³⁹⁾によると、中町東安田は一橋領に属し、酒米の主産地であった。また、明治21年(1888)の「東播九郡連合農産物共進会報告書」には、多可郡から出品された品種の中で「山田穂」は特に多い品種の一つであり、さらに明治29年(1896)の「第6回関西連合府県共進会」への多可郡の出展品種237点の中でも、「山田穂」は96点あり、明治20年代に東安田を拠点とし多可郡で広く普及していたことが伺える。

吉川町説は、年代が不明であるが、吉川町の田中新三

郎が伊勢参りの帰りに、三重県の伊勢山田付近から持ち帰った稲穂に由来し、伊勢山田の地名にちなんで、「山田穂」と名付けたとされる。吉川町説については確たる証拠は残っていないが、「兵庫の酒米」(兵庫県酒米振興会10周年記念誌)の執筆者で、当時、「山田穂」の由来を調査した県農林部農務課技師の飛岡五六によると、吉川町で年輩の方々に取材をすると、多くの方が「山田穂」の由来を田中新三郎が伊勢山田から持ち帰ったものであると言っていたとのことである。一方、吉川町では昔から「奈良穂」という酒米品種が多く生産されていた。元兵庫県酒米振興会副会長の井上克己が昭和21年(1946)の会誌「農業」8月号に「灘酒の配米『播州吉川米』に就て」³⁹⁾との記事を載せているが、その中でも吉川米では「奈良穂」が第一としている。記事の中の特性では、「山田穂」よりさらに長稈穂重型の晩生種で、玄米は「山田穂」よりやや大きく心白の発現も多いことがわかる。こ



図5 山田勢三郎の頌徳碑(中町東安田)

の品種の由来は不明であるが、「山田穂」とは別の品種として扱われている。また、明治43年(1910)3月に開催された兵庫県農会第1回小作米品評会²⁵⁾で式等を受賞した出品人住所氏名の欄に、「奈良穂」で出品した美囊郡口吉川村の田中新三郎の記載がある。この田中新三郎が伊勢山田から「山田穂」を持ち帰ったとされる人と同一人物であれば、田中新三郎が持ち帰ったのは、「山田穂」ではなく「奈良穂」ではないかと思われるが確かではない。

神戸市北区山田町説は、「神戸酒米のしおり」に「藍那穂由来記」³⁰⁾として紹介されている。当時八部郡山田村藍那の東田勘兵衛が、河内の雌垣村(現在の大阪府茨木市)に品質の良い稲のあることを伝え聞き、その種子を入手し、山田村藍那で栽培を始めたもので、雌垣米または椿米と名付け、一俵一俵に椿の葉を付けて出荷していたという。明治23年(1890)7月に開催された第3回国内勸業博覧会に雌垣米として出展し、品質が良かったので日本一の折り紙を付けられた。その後、急激に近隣の農村に拡大し、山田村藍那の地名にちなんで、「藍那穂」または「山田穂」と言われるようになった。

「藍那穂」は松尾孝嶺が編集した農業発達史調査会資料「明治以降に於ける水稻品種の変遷(其1)」³⁶⁾の兵庫の欄に、明治28年(1895)に初めて記載があるが、「藍那穂」とは別に「山田穂」も記載があり、「山田穂」については明治21年(1888)から記載されており、別の品種として扱っている。さらに大正11年(1922)に兵庫穀物検査所が発行した「大正10年度兵庫県米穀検査報告書」²⁾には、「稲種類別作付反別並一反歩収穫高調査表」があり、その中に品種の異同についての記載がある。オリジナル品種は「本系」と記載されるが、「藍那」は「本系」とされており、「山田穂」とは別の品種として扱われている。この調査表には「山田穂」と異名同種の品種としては

「天王穂」や「大神力」など16品種が上げられている。以上の点から、「藍那穂」を地名にちなんで「山田穂」と呼ぶ場合もあったかもしれないが、「山田穂」と「藍那穂」は別の品種と考えられる。

「山田穂」の由来については3説あるとされているが、現在のところ、多可郡中町の山田勢三郎による説が、最も有力と考えられる。

(2) 父親品種「短稈渡船」について

「短稈渡船」の名前の由来は、「渡船」の中でも草丈の短い短稈の品種であることが想像できる。「渡船」は、農商務省農事試験場の加藤茂苞の報告³⁷⁾によると、明治28年頃に、福岡県で栽培されていた「雄町」を滋賀県が取り寄せ、品種名を「渡船」と命名したとあり、「雄町」と「渡船」はほぼ異名同種であるとされている。

「雄町」とは、岡山県の岸本甚造が慶応2年(1866)に作り出した品種といわれている³⁸⁾。「雄町」は、大粒で心白があることから酒米として評価が高く、明治、大正時代の酒米の代名詞であった。滋賀県では明治38年(1905)4月に郡市農会模範農場長会³⁹⁾で、異名同種の品種について、品種名の統一を行っている。その際滋賀県では「渡船」と「雄町」を、全国的に有名な「雄町」という品種名ではなく、「渡船」として統一した。

「渡船」の品種名の由来は、昭和11年に発行された滋賀農報第268号⁴⁰⁾に記載されている。筆者は畠月生という人物で、「農事試験場設立の動機③」との題で滋賀県農事試験場設立当時のエピソードをまとめている。その中に「渡船」の品種名に関するエピソードが紹介されている。其の箇所を引用すると次の通りである。「稲作方面では先ず本県に適當なる産米の選出であつて品質良好と多収を目指し、県内は素より県外では奈良、京都、廣島、兵庫、岡山、山口、福岡から其の府県の重要品種を取寄せ植付て試みた。他府県の分には相當淘汰したものもあるが、神力種、渡船種等の如き後年相當重要視された原種はこの時に本県に入つて来たものである。一中略— 此處に忘れ難いのは、創設當時鹽水選施行の際人夫は少なく日はならず、午後九時頃膳所濱先に小舟を浮かべ鹽水種の清洗ひをする各品種の内、一品種丈け誤つて付札を湖中に流し、暗に探つても到頭分らぬので後から段々調べて見ると、福岡県から来たものだという丈け分かつたので、差當り「渡船」と命名しておいたのが、追々県下に分布した。之が今の渡船の祖先であつて、形態と名號は多少変わつても、今年で四十一年間其血が続いて居ると思へば、まことに尊い感がある。」この記事によると「渡船」の由来は、塩水選後の水洗いを小舟に乗って琵琶湖

の湖上で行っていたところ、品種名の名札を落としてしまい、品種名がわからなくなったため、とりあえずの名前として「渡船」と付けたとしている。「雄町」と異名同種と考えられるようになったのは、その後、品種特性が「雄町」と類似していたことによると推測される。この記事について、雑誌「農業技術」に「イネ在来種“渡船”を再考する」³³⁾との研究を掲載している元山口大学農学部教授の森脇勉氏から、慎重に取り扱うべきであるとの

私信をいただいております、今後滋賀県や福岡県における新たな資料の発見が期待される。

その後、滋賀県では大正5年(1916)～昭和元年(1926)にかけて「渡船」から純系淘汰法により「滋賀渡船2号」、「滋賀渡船4号」、「滋賀渡船6号」、「滋賀渡船26号」を育成し、奨励品種に指定している³¹⁾。

「山田錦」の交配母本である「短稈渡船」は滋賀県農事試験場で育成された品種であるとの記載が大正9年度

表9 兵庫県における酒米奨励品種の変遷

品種名	採用	廃止	品種名	採用	廃止
山田穂	明治45年(大正5年)	大正9年	山田錦	昭和11年	
渡船	明治45年(大正5年)	昭和2年	兵庫雄町	昭和26年	昭和33年
穀良都	大正3年(大正5年)	昭和10年	たかね錦	昭和33年(昭和35年)	平成11年
新山田穂1号	大正10年	昭和15年	兵系酒18号	昭和47年	昭和56年
新山田穂2号	大正11年	昭和11年	フクノハナ	昭和47年	昭和61年
辨慶	大正13年	昭和31年	なだひかり	昭和52年	昭和57年
播磨錦	大正14年	昭和3年	五百万石	昭和52年	
但馬強力	昭和3年	昭和10年	灘錦	昭和57年	平成5年
野条穂	昭和8年	昭和21年	兵庫北錦	昭和61年	
	昭和27年	昭和44年	兵庫夢錦	平成5年	

注) 本表のたかね錦までは、「兵庫県主要農作物奨励品種の葉」(兵庫県農林部農務課1962～3)を参考に、兵系酒18号以降は奨励品種改廃協議会資料を参考に作成した。ただし、山田穂、渡船、穀良都は、大正5年の米麦品種改良奨励規則が公布される以前の原種配布年を採用年とした。また、たかね錦は昭和33年の認定品種への採用年を奨励品種採用年とした。さらに穀良都の廃止年は、兵庫県農会・農会通信第281号、新山田穂1号の廃止年は兵庫県報第1528号、新山田穂2号の廃止年は兵庫県報第1065号の掲載記事の廃止年を用いた。

表10 兵庫県における明治から昭和初期の酒米の作付面積

(単位：ha)

品 種 名	明治 38年 1905	明治 40年 1907	大正 元年 1912	大正 3年 1914	大正 9年 1920	大正 13年 1924	大正 14年 1925	昭和 7年 1932	昭和 8年 1933	昭和 12年 1937	昭和 14年 1939
山 田 穂	3,976	5,355	8,392	8,904	12,309	10,115					
雄 町	4,714	7,509	9,565	6,930	3,718	1,949					
政 岡	3,130	3,382	3,301	3,260	2,001	2,068					
白 玉	1,533		2,310	2,872	1,822						
萬 作 坊	917	1,141	2,252	2,055	1,307	1,154					
天 皇	2,624	1,884	2,727	1,799	2,129	1,106					
荒 地	203	393	1,349	2,241	654						
福 山	581	2,184	2,959	1,359							
奈 良	1,064	2,073	1,648	1,577	3,096	2,567					
渡 船					1,702	2,367	3,303				
穀 良					2,191	5,020	6,074	1,585	992		
藍 那					592						
新 山 田 穂 1 号							6,590	4,509	2,228	1,302	
新 山 田 穂 2 号							5,460	4,113	1,716		
辨 慶						1,106	1,585	12,849	11,675	14,340	12,091
但 馬 強 力								2,071	685		
野 条 穂									5,179	4,389	3,455
山 田 錦										473	6,351

注) 大正3年までの雄町には渡船を含む。大正9年の山田穂、雄町、政岡、白玉には異名同種品種の面積も含む。大正13年の山田穂は、新山田穂1号と新山田穂2号を含むものと推定。

の兵庫県立農事試験場業務工程⁷⁾にある。兵庫県に導入された年次は大正9年(1920)の本場での水稻品種比較試験が供試3年目であることから大正7年(1918)頃と考えられる。滋賀県では「短稈渡船」との品種名はないが、育成年次からは「滋賀渡船2号」,「同4号」,「同6号」のいずれかの品種と思われる。そのうち「滋賀渡船6号」は長稈で穂数が少ないことから、「短稈渡船」とは特性が異なるので³³⁾, 品種特性の資料がないが、「短稈渡船」は「滋賀渡船2号」または「同4号」と考えられる。現在、酒米試験地で品種保存している「渡船2号」は独立行政法人農業生物資源研究所のジーンバンクから取り寄せたものであるが、表7の「渡船2号」の特性と表5に示す当時の「短稈渡船」の特性は、脱粒性を除いてよく似ているので、ほぼ同品種と考えられる。ジーンバンクでの品種名は「渡船2号」で滋賀の名称が抜けているが、この品種は「滋賀渡船2号」であり、兵庫県に導入され「短稈渡船」と呼ばれた品種とほぼ同じものではないかと推測される。

4 「山田錦」の普及

(1) 「山田錦」が奨励品種に採用される前後の酒米生産状況

表9に兵庫県における酒米奨励品種の変遷を示す。現在の奨励品種制度の始まりは、大正5年(1916)に公布された米麦品種改良奨励規則に基づいている。ただし、

本県の場合は、前述したとおり明治45年(1912)に原種育成事業を開始しており、酒米としては、「山田穂」,「渡船」,「奈良穂」,「改良白玉」,「都」,「福山」,「萬作坊主」が、大正3年(1914)には「穀良都」の原種配布が行われていた。

表10は明治末期から昭和初期にかけての酒米の品種別作付面積である。明治、大正、昭和初期の品種別水稻作付面積に関する資料は引用した資料^{2, 3, 5, 21, 32, 41)}のみで非常に少ない。これらの資料によると、明治末期から大正にかけては、「山田穂」,「雄町」(「渡船」も含む)が多く作付けされていた。大正末期には「新山田穂1号」,「穀良都」,「新山田穂2号」が多く、昭和の初めには「辨慶」,「野条穂」が普及した。「山田錦」が奨励品種に採用された昭和11年(1936)の資料はないが、翌昭和12年(1937)の作付面積は、「山田錦」は473ha,「辨慶」が14,340ha,「野条穂」が4,389ha,「山田穂」が1,302haであった。「山田錦」は奨励品種採用後急速に増加し、昭和14年(1939)には6,350haとなっている。その後、昭和20年の終戦後までは資料が残っていない。

(2) 「山田錦」の普及と食糧統制

「山田錦」の普及拡大については、「兵庫の酒米」²⁸⁾にエピソードが紹介されている。兵庫県の酒米は灘や伊丹の酒造メーカーに古くから使用されているが、灘や伊丹

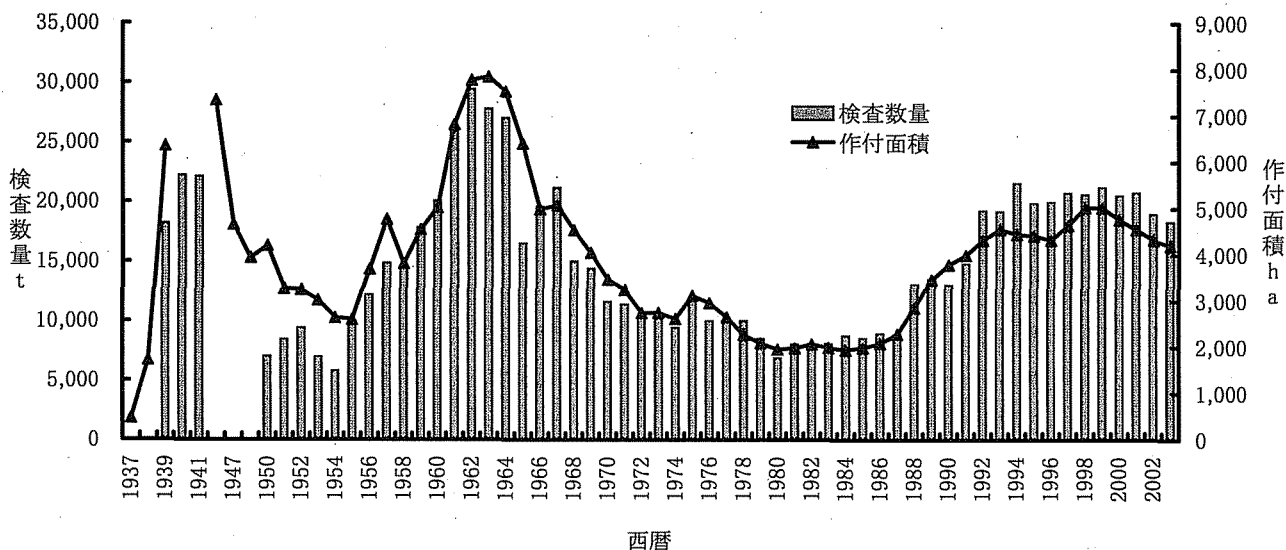


図6 山田錦の検査数量と作付面積の推移(1937年-2003年)

の酒造メーカーにとって麴米にする最も良質の酒米は兵庫県産よりも大阪の「中上米」(ちゅうがみまい)であった。「中上米」の中心地は大阪府三島郡茨木地域である。兵庫県産の酒米は、麴米にも使用されていたが、多くが掛米として利用されていた。しかし、戦争が激しくなる中、食糧統制が強化され、昭和15年9月に臨時米穀配給統制規則が施行されたため、米の県外への移出は知事の許可が必要となり、県外産の米の使用に統制がかけられた²⁷⁾。このため酒造メーカーは「中上米」が使用できなくなり、兵庫県産米を使用せざるを得ない状況になった。このような状況の中で「山田錦」をはじめ兵庫県産米での麴作りが研究され実用化されたということである。当時の様子を知る酒米振興会の初代事務局長森本巖の話では、「山田錦」は心白が多く、当初はもち米のように麴にしにくく、酒屋は苦勞したとのことである。

食糧統制の強化は、「山田錦」が麴米として評価される絶好の機会を得る契機となった。酒造りは使い慣れた米が求められ、それまで使っていた品種以外の米は敬遠される。そのため特に新品種は、その酒造適性を評価されるチャンスが少ない。「山田錦」については、このような戦時下という特殊な状況が、その酒造適性を開花させ、普及拡大の後押しになったと考えられる。

戦後、「山田錦」は生産が拡大し、昭和38年(1963)に7,840haとなり、検査数量も27,795tに達した、その後減少したが、昭和60年(1985)から再び増加し、4,000~5,000haの作付面積を確保し、兵庫および全国の清酒生産を支えている。

謝辞

元酒米振興会事務局長の森本巖氏、元菊正宗酒造の森太郎氏、元県農林部農産園芸課長の飛岡五六氏、元白鹿記念酒造博物館の寺岡武彦氏および現博物館の戸塚昭彦氏、柴橋明子氏、藤川禎次氏の次女片山洋子氏、ご子息の藤川永生氏、元山口大学農学部教授森脇勉氏の方々からは貴重な資料や情報の提供を頂いた。記して厚くお礼申し上げます。

最後に、「農会報」の記事は、農林水産技術会議事務局筑波事務所作成の農学情報資源システム(Agropedia)の農林水産研究成果ライブラリをから引用させていただいた。

引用文献

- (1) 兵庫県(1936): 水稲原種改廃に関する件: 兵庫県報 第1065号, 7-9
- (2) 兵庫県穀物検査所(1922): 大正10年度兵庫県米穀検査報告, 167-170
- (3) 兵庫県穀物検査所(1925): 大正13年度兵庫県米穀検査報告, 116-118
- (4) 兵庫県教育委員会(1967): 藤川禎次—酒米の王者「山田錦」普及の功労者—: 郷土百人の先覚者, 341-345
- (5) 兵庫県立農事試験場(1917): 水稲品種分布調査(大正5年第5号)
- (6) 兵庫県立農事試験場(1918): 大正6年度業務功程
- (7) 兵庫県立農事試験場(1921): 大正9年度業務功程, 50
- (8) 兵庫県立農事試験場(1922): 大正10年度業務功程
- (9) 兵庫県立農事試験場(1925): 大正13年度業務功程
- (10) 兵庫県立農事試験場(1926): 大正14年度業務功程
- (11) 兵庫県立農事試験場(1927): 大正15年度業務功程
- (12) 兵庫県立農事試験場(1929): 昭和2年度業務功程
- (13) 兵庫県立農事試験場(1930): 昭和3年度業務功程
- (14) 兵庫県立農事試験場(1931): 昭和4年度業務功程
- (15) 兵庫県立農事試験場(1932): 昭和5年度業務功程
- (16) 兵庫県立農事試験場(1933): 昭和6年度業務功程
- (17) 兵庫県立農事試験場(1934): 昭和7年度業務功程
- (18) 兵庫県立農事試験場(1935): 昭和8年度業務功程
- (19) 兵庫県立農事試験場(1936): 昭和9年度業務功程
- (20) 兵庫県立農事試験場(1937): 昭和10年度業務功程
- (21) 兵庫県立農事試験場(1938): 米麦原種一覧表
- (22) 兵庫県立農事試験場(1939): 昭和11年度業務功程
- (23) 兵庫県立農事試験場(1939): 昭和12年度業務功程
- (24) 兵庫県立農業試験場(1953): 農業試験場60年史, 18
- (25) 兵庫県農会(1910): 明治42年度年報, 12-35
- (26) 兵庫県農会(1936): 農会通信 第304号
- (27) 兵庫県農会(1940): 農会通信第415号, 2
- (28) 兵庫県酒米振興会(1961): 兵庫の酒米(兵庫県酒米振興会10周年記念誌)
- (29) 池 隆肆(1974): 稲の銘—稲民間育種の人々—(オリエント印刷) 41-48
- (30) 井上 克己(1946): 灘酒の酏米「播州吉川米」に就て: 農業(大日本農会) 767号, 60-66
- (31) 熊谷 健・大隅喜代司(1985): 滋賀県水稲奨励品種一覧表(大正5年から現在まで): 滋賀農研報 第26号, 1-7
- (32) 三宅 瑞穂(1936): 品種問題より見たる近畿地方の稲作: 農業及び園芸 11(1), 293-311
- (33) 森脇 勉(2003): イネ在来種“渡船”を再考する その2 わが国内における出自を求めて: 農業技術 58(12), 565-568
- (34) 西田 乙一(1960): 藍那穂由来記: 神戸酒米のし

- おり(神戸市農政局・神戸市酒米協会), 16
- ㉓ 西脇市(1983):西脇市史・本編, 739-741
- ㉔ 農業発達史調査会(1950):明治以降に於ける水稻品種の変遷(其1):農業発達史調査会資料 第30号
- ㉕ 農商務省農事試験場(1908):米ノ品種及其分布調査:農事試験場特別報告 第25号
- ㉖ 農林省農務局(1936):水稻及陸稻耕種要綱, 441
- ㉗ 滋賀県農会(1905):滋賀県農会報 第38号, 43
- ㉘ 滋賀県農会(1936):滋賀農報 第268号, 14-19
- ㉙ 食糧庁調査課(1955):米の品種別分布状況(昭和14、26、27、28、29年産), 41-42
- ㉚ 菅 洋(1990):庄内における水稻民間育種の研究(農山漁村文化協会) 134-137